

環境出前授業 社会科見学

2月8日、苫小牧市立明德小学校の4年生36名が参加して北海道エコ・アクション「環境出前授業」が行われました。今回は、全国各地で社有林を守り育てている三井物産、三井物産フォレストや、授業会場でもあるイワクラ、苫小牧バイオマス発電の方々が先生となり、「木を育てる・活かす」仕事のお話を聞き、「木づかい」の現場を実際に見学するという内容に、子どもたちは終始目を輝かせていました。

苫小牧市立
明德小学校の4年生が
「木づかい」を学びました!



実際に森を探検したかった!

木材を削る音と力がすごかった!

実際に木を切ってみよう!

チップがいろいろあった!

電気がどうやって運ばれているのかわかった!

ノートや教科書が木で出来ているのびっくり!

1時間目 三井物産・三井物産フォレスト 「森のめぐみと林業」

森は木材や紙、燃料、水や食糧、動物たちのすみかなど、さまざまな恵みをもたらしてくれます。森を守るためには自然のままそっとしておくべき? いえいえ、森は放っておくとどんどん荒れてしまいます。苗木を植えて下刈りや雑草払いなどの手入れをし、適度に間伐をして大きくまっすぐな木を育て、伐採して利用する。そうすることで再び苗木が植えられ、林業のサイクルがうまく回っていくのです。暮らしに役立つさまざまな形で木を使う「木づかい」が森を守り、その恵みを次世代へ受け継いでいくことになるのです。



「FSC®森林認証」マークが表示された製品は、林業によって適切な森林管理がされている「木づかい」の証し。普段使っているノートや鉛筆にもマークが付いているものがあると知った子どもたち、「木づかい」がぐっと身近になったようです。みんなのおうちにもいろいろありそうですね。



三井物産(株) 環境・社会貢献部 部長 青藤 江美さん



三井物産フォレスト(株) 平塚 山林事務部 部長 細島 彩起子さん

三井物産の森

三井物産が保有、三井物産フォレストが管理する森は全国74か所、総面積約4万4千ヘクタール。その8割が北海道にあります。三井物産は林業を通じてこれらの森を適切に管理するとともに、森林体験プログラムや社会貢献活動など多面的な活用も行っていきます。

3時間目 「木づかい」の現場を見てみよう!



3時間目はバスに乗って施設の見学です。イワクラの敷地内に入ると、高く積み重ねられた廃材やチップがあちこちに。これらはホモゲンなどの製品に再生されます。建築解体材はのこぎりくずまで捨てずに利用。イワクラの「もったいない精神」の証しです。苫小牧バイオマス発電では、集められた丸太がチップパーと呼ばれる鉛筆削りのような機械で小さく粉砕されて保管されます。写真の子どもたちが取り囲むチップの山が一般家庭1万軒分の発電量にあたるそうです。普段何気なく使っている電気にも、息の長い林業のサイクルによって守られてきた木のいのちが宿っている。そう思うと、電気の無駄遣いなどできそうにありません。おうちのみなさんにも教えてあげたいこと。今日1日で子どもたちはたくさん学んだみたいです。

授業を終えて



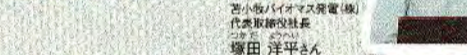
苫小牧市立明德小学校 鈴木 秀寿先生
今回の授業は、子どもたちはもちろん私たち大人にとっても、自分の暮らしが豊かになっていくことを実感する良い機会になりました。地元企業による循環型社会への取り組みを知り、発電用チップを削って木の匂いや感触を味わった経験は、子どもたちの心にしっかりと刻まれたことでしょう。再生可能エネルギーを授業で学ぶ5年生にも、ぜひ受けさせてあげたいと思える内容でした。

2時間目 イワクラ・苫小牧バイオマス発電 「木材の有効利用」について学ぼう



(株)イワクラ 管理技術開発室 部長 高橋 賢孝さん

木と共に100年を超える歴史を歩む(株)イワクラ。1953年に日本初のホモゲン(パーティクルボード)工場を操業以来、木材の有効利用に積極的に取り組んできました。建築解体材も加工して建築材料となるホモゲンに再生。製材にならない間伐材、山に捨てられていた根元や枝葉はペレットやチップ、薪などの燃料に。真冬の北海道で新鮮な野菜や花が育つ農家のビニールハウスにも、これらの木質燃料が暖房に使われているのだそうです。そして今、木の新たな有効利用として注目されているのが「木質バイオマス発電」。2014年に三井物産とイワクラ、住友林業、北海道ガスの共同出資により設立された苫小牧バイオマス発電では、木質燃料を燃やして水蒸気を生じさせ、蒸気の圧力でタービンを回して電気をつくります。未利用材の活用により安定した発電量を確保でき、太陽光や風力と違って自然環境に左右されることもありません。



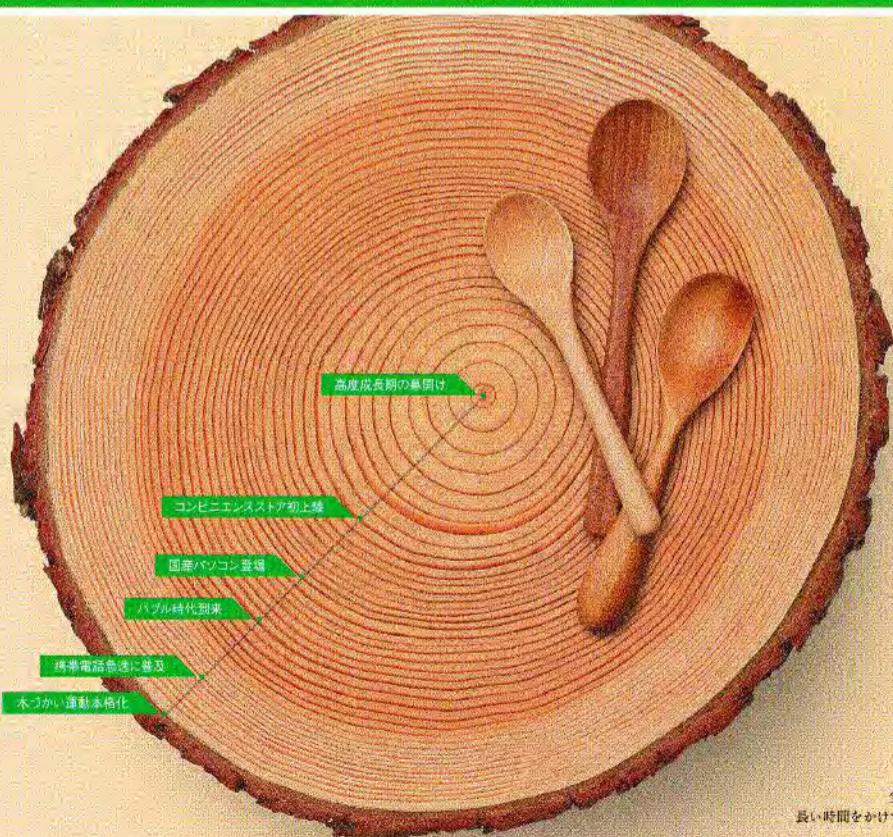
苫小牧バイオマス発電(株) 代表取締役社長 塚田 洋平さん



今できること、「考える」から「行動する」へ! 詳細はホームページへ <http://adv.hokkaido-np.co.jp/eco/> 北海道エコアクション 企画制作/北海道新聞社広告局

おじいさんたちが植えた木を、わたしたちが植える木を、みらいの孫たちが使う。

日本の暮らしが、めまぐるしく変化してきたこの50年。いま、あらためて、木のぬくもりを思い返し、生活に取り入れて、自然を思いやる「木づかい」の毎日へ。何千年も前に植えられた木を、たいせつに使う。そして、何十年後かのために、あたらしく植える。それは、森林を代替させ、健康に保ち、みどり豊かな国を受け継ぐことに、つながります。三井物産は、次世代のことも考えながら、「植える」「育てる」「切る・使う」が循環する、持続可能な森づくりに取り組んでいきます。木のやすらぎと、森のめぐみを、次の世代へ。



高度成長期の集約伐
コンビニエンスストア初登場
国産パソコジ登場
パソコジ時代到来
携帯電話急速に普及
木づかい運動本格化

高度成長期の頃に植えられたカラマツの切り株です。



三井物産の森

全国70か所以上、約44,000ha。長い時間をかけて、大切に守り育てられています。